

群 教 セ	G02 - 02
	令7.290集
	社会 - 小

社会的事象に対して、 自分の考えをもつことができる児童の育成

— どっぷりタイムとコンパスタイムを通して —

特別研修員 岩瀬 建樹

I 研究の概要

1 主題設定の理由

現代は変化が激しく、情報が過剰な社会である。インターネットやSNS等を通して多様な情報に容易に触れられる一方で、情報を鵜呑みにせず、その背景や根拠を吟味し、真実を見抜く力がこれまで以上に求められている。このような社会を生きる児童には、知識を覚えることにとどまらず、課題を見だし、他者と対話しながら思考を広げ深め、解決に向けて進む力が必要となってくる。近年、教育界では「エージェンシー」の発揮が重視されており、社会科においても社会的事象を多面的・多角的に捉え、立場の違いや資料の内容を比較・検討しながら、自分の考えを主体的に形成していく学習が不可欠である。群馬県が掲げる「群馬県教育ビジョン」においても、児童が自ら学びをつくり、学習課題の解決に向けて思考・判断・表現する力を育てることを目指している。

研究協力校の児童は、社会科の学習が「好き」、または「やや好き」と答える児童が多く、授業にも落ち着いて取り組むことができる。調べたことをノートやタブレットを用いて整理したり、表などにまとめたりすることもでき、友達に自分の考えを伝え合う活動も成立している。一方で、調べたことを基に考えを深めたり、友達の考えに触れて自分の考えが揺さぶられたり、試行錯誤したりする場面は少ない。また、単元間のつながりを意識し、見直しをもって学習に臨む姿はあまり見られなかった。

基本研究は、社会科における基本的な学習過程である「つかむ→追究する→まとめる」を基盤とし、追究の途中で既習内容を基に身近に感じられる問いについて考える時間として「どっぷりタイム」を設定した。また、「まとめ」と次の単元の「つかむ」をつなぐ初めて見る資料を通して次の単元全体の見直しをもてる時間として「コンパスタイム」を設定した。これらの学習過程において、児童が自己決定・対話交流・試行錯誤を重ねながら学習に取り組むことで、社会的事象を多面的・多角的に捉え、情報の背景や根拠を吟味しながら自分の考えを形成していく社会科におけるエージェンシーの発揮を図ることをねらいとした(図1)。

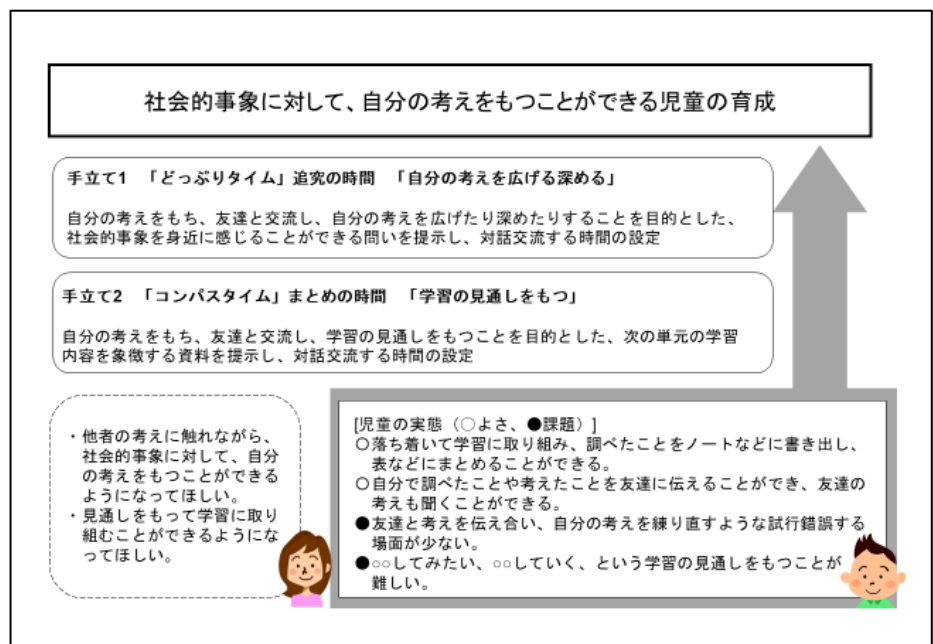


図1 研究のイメージ

2 具体的な手立て

手立て1 「どっぷりタイム」 ー 追究の時間 「自分の考えを広げる・深める」 ー

○【問い】の提示

これまでに学習してきた内容や既習事項を基に、社会的事象を身近に感じることができ、正解が一つに定まらない問いを提示した。

例

- ・ 「復旧」と「復興」どちらに力をいれるべきだろうか。
- ・ 縄文・弥生・古墳どの時代に住みたいか。
- ・ この時代を象徴するのは誰なのか。

① 自己決定

問いに対して、既習内容や資料を基に自分なりに考えをもつ時間を確保し、児童が「自分はこう考える」と自分の考えをもつことができるようにした。

② 対話交流

自分の考えを友達に伝えたり、友達の考えを聞いたりする対話交流を通して、多様な見方や考え方に触れられるようにした。

③ 試行錯誤

対話交流を通して考えが揺さぶられ、「どちらの方がよいのか」「他の考え方はあるのか」と悩みながら、自分の考えを広げたり深めたりできるようにした。

手立て2 「コンパスタイム」 ー まとめの時間 「学習の見直しをもつ」 ー

○【資料】の提示

単元のまとめの時間や次の単元のつかむ時間において、次の単元で扱う社会的事象を象徴する資料を提示した。

例

- ・ 次の時代の街並みや人々の暮らしの様子を示した資料
- ・ 時代の違いが視覚的に分かる文化の特徴を表している資料

① 自己決定

提示した資料を基に、自分なりの視点で気付いたことや疑問をもつ時間を確保し、「こんなことがあったのかも知れない」と自分の考えをもつことができるようにした。

② 対話交流

自分が気付いたことや疑問に思ったことを友達に伝えたり、友達の考えを聞いたりする対話交流を通して、多様な見方や考え方に触れられるようにした。

③ 試行錯誤

対話交流を通して生まれた気付きや疑問を基にして、「この変化は何が関係しているのだろうか」「何か理由があるのだろうか」とこれからの学習で解決していく課題を探し、見直しをもつことができるようにした。

II 実践例

1 単元名 「江戸幕府と政治の安定」

2 授業の実際

本時は、全6時間計画の第5時に当たる。これまでの追究してきた既習内容を基に、身近な社会的事象で正解が一つに定まらない「外様大名、百姓、町人の中で誰が最も苦勞をしたのだろうか」という、問いを提示した。児童は既習内容や資料を手がかりにして、個人で考え、自己決定を行った後、自分の考えと異なる友達と対話交流を行い、多様な考えに触れた。そして、自分の考えを見つめなおし、試行錯誤しながら自分の考えを広げたり深めたりした。

コンパスタイムは全6時間計画の第6時と次の単元の第1時にあたる。次の単元につながる資料「江戸時代の後半、歌舞伎を楽しむ人々の様子」を提示し、児童が気付きや疑問をもつことができるようにした。資料を基に一人一人が気付いたことや疑問を整理し、自己決定を行った後、対話交流を通して多様な気付きに触れた。そして、「なぜこのような変化が起こっただろうか」などの疑問を基に、試行錯誤しながらこれからの学習で解決していく課題を探りつつ、次の学習への見通しをもつ姿が見られた。

(1) 手立て1について「どっぷりタイム」

単元の追究の時間の最後に、これまで学習してきた「外様大名、百姓、町人」という立場を取り上げ、江戸幕府の政治によって、「外様大名、百姓、町人の中で誰が最も苦勞をしたのだろうか」という社会的事象を身近に感じられる問いについて考える「どっぷりタイム」を設定した。児童は、立場の違う人々の当時の暮らしを想像し、自分の考えを広げたり深めたりした。

つかむ過程では、児童は前時までの学習で感じた江戸時代についての印象を集約してできた江戸時代のイメージ図を見た。江戸時代には苦しそうな顔をした人がたくさんいたことを感じ、大名で苦勞したのは、外様大名、庶民で苦勞したのは、百姓や町人と立場をあげ、「誰が最も苦勞したのかな？」というめあてをつかんだ。

追究する過程では、まず、個人でこれまでに児童が学習してきたことを基にしたり、新たな資料を基にしたりして、ランキング付けを行った(図2)。その後、意見が異なる児童を3～4人組にしてそれぞれの考えの根拠を基に伝え合った。外様大名と百姓を1位に選んだ児童がいたグループは「百姓は頑張って育てた米などを半分以上も年貢でとられて苦勞をしている。キリスト教徒だったら、信じていたものを禁止されてしまうし」「外様大名は人質を取られて、参勤交代はものすごく費用がかかるし、家族に会えない、お金もかかるし、すごく大変だと思う」などと話し、これまでの学習を根拠として考えを広げていた(図3)。

まとめる過程では、グループで追究したことを基に、最も苦勞したのは誰かをワークシートに記入した。友達の意見を聞きランキングを変えた児童や友達の理由に共感をしながらまとめをしていた(図4)。その後、大単元の課題でもある「江戸時代はなぜ長く続いたのか?」という問いについても考え、最後までどっぷり考え続けた。自分の考えがまとまると、同じ考えの友達や異なる考えの友達の所に行き、自然に考えを伝え合う姿も見られた様子から対話交流しながらエージェンシーを発揮していた、と考察する。



図2 個別で追究(自己決定)



図3 グループで追究(対話交流)



図4 考えをまとめる(試行錯誤)

(2) 手立て2について「コンパスタイム」

コンパスタイムは、単元のまとめの時間に設定した。つかむ過程では、児童が前時までの追究を基に、単元の課題を解決することを共有した。結論を考える過程では、学習問題である「江戸幕府は、政治を安定させるために、どのようなことに力を入れたのでしょうか」という問いに対してそれぞれ考えた意見を基にグループで話し合った後、学級全体でも話し合い、江戸幕府の厳しい統制によって政治が安定したことについて共有した。一人一人の振り返りでは、江戸幕府が政治を安定させるために行った政策をチャット風にしてまとめた。

学習問題を解決した後のコンパスタイムでは、「江戸時代の後半、歌舞伎を楽しむ人々の様子」の資料を提示し、次の単元への見通しをもった。資料を見て気付きや疑問を書き出す(図5)、気付きや疑問を友達と共有する(図6)疑問を予想して次の学習の見通しをもつ(図7)。児童の記述には「苦勞をした人がたくさんいた時代だったのに、楽しそうな人がいっぱいいるのはなんでだろう?」「何か新しい取り組みがあったのかな?」などあり、資料から次の単元への疑問をもち、それを予想する見通しをもった。



図5 個別で気付きや疑問を書き出す
(自己決定)



図6 気付きを共有する
(対話交流)



図7 疑問を予想して見通しをもつ
(試行錯誤)

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- どっぷりタイムを継続して取り組んできたことで、児童が「自分はどうか考えるか」について根拠を基に言葉にしようとする姿が見られるようになった。
- 友達の考えに触れることで、自分の考えが揺さぶられ、再び考え直すという思考、根拠を探す、という行動へとつながった。そして、「でも、やっぱり…」とまとめを書く場面が見られた。身近に感じられる問いについて考える時間を設定することで、単元における「追究」が説明や暗記で終わらず、「自分の見方をつくり、考えを広げ深めていく学び」へとつながっていった。
- コンパスタイムを設けたことで、次の学習への気付きや疑問をもち、交流を通して視点を明確にし、学習の見通しをもつことができた。資料や街の様子想像画から「次はどんな時代だろう」「なぜ変化が起きたのだろうか」といった問いが児童自身から生まれ、「見通しと問いをもって始まる学び」へとつながった。

2 課題

- グループ編成の意図は、さらに明確にできる余地があった。今回はランキング形式で考えを広げるねらいであったが、同じ順位でも理由が異なる児童を組み合わせるなどすれば、思考の質はより高まったと考えられる。今後はねらいに応じて対話の目的を見通し、グループ編成やシンキングツールを工夫していく必要がある。
- コンパスタイムにより変化や新たな発見に目を向ける姿は見られたが、「変わらないもの、続けているもの」に着目することには難しさも見られた。歴史を捉えるためには、変化とともに継続しているしくみや人々の願いにも目を向けられるようにしたい。「変化」「発見」「継続」の視点を意識できるよう、教師が併走する環境づくりが必要である。